第１号　　２０２５年１１月

シームレスな共育

川根本町教育委員会　教育長　石原一則

０歳から１８歳までの継ぎ目のない共育を実現させよう！

「三ツ星学園」「光の森学園」誕生から２年目の今

県内で２・３番目に誕生した２つの義務教育学校は、規模や再編の経緯も異なるそれぞれ違った特色のある義務教育学校ですが、目指すのはシームレス（継ぎ目がない）共育です。そのシームレスな共育を実現させるために、私たちが大切にしていかなければならない３つの要素が見えてきました。それは、①主体性を育て②多様性を受け入れ③可能性を信じるということです。

この３つの要素を視点として、二つの義務教育学校誕生から２年目の今を振り返ります。

【学ぶ主体は子ども】

10 月４日は光の森学園で、10 月５日は三ツ星学園で体育大会が実施されました。スケールこそ違いますが、どちらの学校にも共通して言えることは、先生や上級生が体育大会を作っているのではなく、１年生から９年生の全ての子どもたち一人一人が、当事者意識を持って参加しているということです。共通するキーワードは「本気」です。子どもたちの姿は正に「本気」そのものでした。

《三ツ星学園　本気の綱引き》《光の森学園　本気のソーラン節》

【一人一人はみな違う】

昨年度末、義務教育学校・保育園・川根高校の職員と地域のみなさんで、幼児教育について学ぶ機会を設けました。また、４月には関西大学の岩﨑保之氏をお招きして「川根の子どもを語る会」を実施しました。さらに９月末には、元さいたま市教育委員会教育長の細田眞由美氏に来町していただきました。

こうした取組をとおして、乳幼児から高校を卒業するまでの全ての子どもたちが、大切な一人一人なのだと実感しました。今後、私たちがこの川根本町の子供たちの成長のために何ができるのかを一人一人に寄り添いながら考えていきたいと思います。

【子どもは可能性の塊だ】

「なぜ、学年はあるのだろう」「なぜ、子供たちは前（黒板）を見て学ぶのだろう」。こうした問いに「ずっとそうやってきたから」が当たり前の世界は閉ざされた世界です。そして閉ざされた世界での子どもたちの可能性は限定的です。でも、当たり前だと安易に答えを出すのではなく、常に問い続け挑戦する開かれた世界は、子どもたちの可能性の扉を開きます。私は子どもたちには開かれた世界で学んで欲しいと願っています。

臨床心理士として多くの講演を行い書物を遺した河合隼雄はこう述べています。

「この宇宙のなかに子どもたちがいる。これは誰もが知っている。しかし、ひとりひとりの子どものなかに宇宙があることを、誰もが知っているだろうか。それは無限の広がりと深さをもって存在している。大人たちは、子どもの姿の小ささに惑わされて、ついその広大な宇宙の存在を忘れてしまう。」

私はこの河合隼雄の教育観を皆さんと共有したいと思います。広大な宇宙というのは無限の可能性です。子どもは有能な学び手であり、未来を自らの力で切り拓いていける力を持っているということを信じ続けたいと思います。

「教育」ではなく「共育」であることの必要性

私は以前から「きょういく」を、教え育てる「教育」ではなく、共に育つ「共育」という言葉を使っています。

なぜなら、川根本町が魅力的で持続可能な町であり続けるためには、「共育」という考え方が必要だからです。学ぶということが学校に通う子どもたちだけのものではなく、この町に住む、あるいは関係するすべての人たちにとって、楽しく生きがいに思えることであってほしいからです。そこから地域への愛情や誇りが生まれるのだと思います。

学ぶことに年齢・性別・国籍は関係ありません。シームレスな共育を通して、地域への誇りと愛情が育ち、一人一人が持つ可能性が開花する川根本町を共に創っていきましょう。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

これからも川根本町のシームレスな共育について、お知らせしていきたいと思います。

ご意見ご感想をお聞かせください。

E-mail :
k-ishihara@town.kawanehon.lg.jp